

第9回男女共同参画シンポジウム報告 化学系の大学生・大学院生みんな集まれ!

男女共同参画推進委員会

第89春季年会の初日、3月27日、日本大学船橋校舎において第9回男女共同参画シンポジウムが開かれた。今年のテーマは“男女が共に働き続けるためのアドバイス”を若い大学生、大学院生に与えるために、基調講演、日本化学会の取り組みの報告、フォーラム形式によるロールモデルの紹介などを中心に実施された。中西宏幸日本化学会会長が開会の挨拶、野村淳子シンポジウム実行委員長が趣旨説明を行った。

基調講演と日本化学会の取り組み

基調講演は、内閣府男女共同参画局長板東久美子氏により「男女が共に生きる社会へ～男女共同参画とワーク・ライフ・バランス」と題して、「男女共同参画」とは何か、なぜ必要なのかについて、国際比較などに基づき解説された。人権の尊重、平等の重要性、さらに最近共同参画で標語となっている“diversity 多様性”の尊重によって、多様な人材、能力、個性、価値、視点などを活かす社会・組織を実現するためにこそ、「男女共同参画」が必要であることが主張された。

続いて佐々木政子男女共同参画推進委員会委員長から化学会での現状と委員会の取り組みが紹介された¹⁾。森義仁委員からは文部科学省の「女子(中)高生の理系進路選択支援事業」への参加取り組みの経験が紹介された。

フォーラム

後半のフォーラムでは、7名の講演者が登壇して、それぞれの経験に基づく話題を提供した。元資生堂R&D企画部学術室室長 長沼雅子氏はサンスクリーン評価の研究と実施をしながら、国際的に活躍するまでの貴重な経験を伝え、リコーソフトウェア(株)取締役会長 國井秀子氏は日本の職場は女性のキャリア構築には様々な障害が残っているが、男女格差が比較的少ない技術者・研究者の職場では、イノベーションに貢献するタイプの人材が不足しており、女性が活躍できるチャンスが広がっていることを説かれた。日本女子大学客員教授 遠山嘉一氏は応用物理学会での男女共同参画での取り組みの経験を生かした大学での女性研究者支援事業について解説された。シンポジウムに実行委員長の夫人と“共同参画”された(株)半導体エネルギー研究所の野村亮二氏は企業での女性研究者の職場環境について紹介し、日本人の国民性が共同参画を進める上で大きなネックになっていると指摘された。日本大学の松下祥子氏は、研究室主宰者になってから出産・育児という計画どおりに運んでハッピーと思いきや、切迫流産のおそれ動きがとれなくなるという想定外のハプニングをいかに乗り越えたかという劇的なロールモ



写真 パネルディスカッション

デルの紹介をされた。神奈川大学 引地史郎氏は研究室を巣立った女性研究者がどのように進路を選択し、現在どのように過ごしているかについて、多くの例を紹介され、女性の「柔軟さとしたたかさ」にエールを送った。三菱化学エンジニアリングの鈴木昭子氏は現在第二子の育休中であるが、結婚出産後も継続勤務できる職場環境をどのようにつくるかを実現するために、努力されているようすを報告された。最後に、講演者全員のパネルディスカッションで会場からの意見に応じて、男女共同参画を進めるのに必要な条件などについて意見を交換した。残念ながら当初期待していた学生の参加者は多くはなかったが、全講演者が懇親会にも参加され、男女共同参画を推し進める熱い情熱が伝わるシンポジウムであった。

1) 佐々木政子, 化学と工業 2009, 62, 273.

[下井 守(東京大学、担当理事)
佐々木政子(東海大学)]

© 2009 The Chemical Society of Japan